

結婚と出産の変容：水俣と水俣病の物語(1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-04-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平岡, 義和 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006583

結婚と出産の変容

—水俣と水俣病の物語(1)—

平 岡 義 和

1. はじめに

水俣病の公式発見は昭和 31 (1956) 年 5 月 1 日とされている。周知のように、実際には、それ以前から発生していたことは確実である。しかし、公式発見が昭和 31 年とされていることには、象徴的な意味合いがあるように思われる。水俣病の時代と高度経済成長期とがちょうど重なっていることを示しているのだ。高度経済成長は、単に経済が急速に成長したというだけでなく、人々の生活にも非常に大きな変化をもたらした。したがって、水俣の人々は、高度経済成長にともなう生活の変容とともに水俣病を経験したことになる。水俣における聞き取りの際も、水俣病に関する話は、当然そうした生活の変化と絡み合った形で語られていた。

これから書きつづっていく一連の論考では、高度経済成長にともなって起こった水俣の人々の生活の変化を記すとともに、そこに浮かび上がってくる、あるいは現れてこない水俣病の姿を明らかにしたいと思う。したがって、前稿(平岡、2006)でも述べたように、「患者」の方々ではなく、その当時水俣の街中を中心とした地域に住んでいた「一般の人々」の視点から、水俣における生活の変容と水俣病のありようを描くことになる¹⁾。そうした試みを通して、高度経済成長期の水俣における生活の変容とはどのようなものだったのか、またそれは水俣病とどのようにつながっていたのか、あるいはつながっていなかったのか、考えていくことにしたい。

今回の論考で取り上げるのは、結婚と出産の変容である。聞き取りでは、生活の様々な側面について話を聞いている。したがって、どのような側面から書き始めるか、それを決める必然的な理由が見あたらず、かなり迷った。結局、結婚、出産からはじめることにしたのは、いずれも新生活、人生のスタートであり、書き出しにふさわしいかと考えたからにすぎず、それ以上の理由があっ

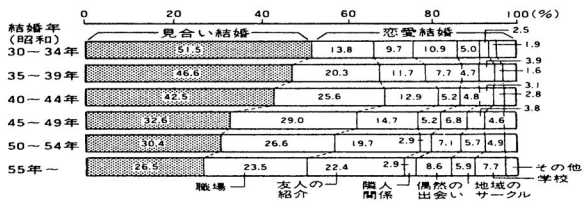
たわけではない。とりあえず、まずこの2つの話からはじめてみることにしたい。

なお、多くの方の聞き取りを使わせていただくことになるが、聞き取りの年月日は、本文中に（ ）で記した。その日付には西暦を用いる一方で、本文中の年号の記述では、基本的に「昭和」を使用した。個人的には、通常「昭和」を使わないのだが、聞き取りした話の中では、ほとんど「昭和」が用いられたこともあり、この時代のことを記すには、西暦より元号である「昭和」の方がふさわしいのではないかと考えたからである。

2. 結婚の変容

さて、この時代には結婚の契機に大きな変化が生じた。まず、それは恋愛結婚の増加という形であらわれた。昭和22年には22%であった恋愛結婚の割合が、昭和30～34年には49%、そして昭和35～39年には過半数を超え、53%程度を占めるようになったのである（湯沢、1987:54-59;図1参照）。しかし、それ以外の結婚を「見合い」結婚と呼ぶのが適切かと言うと、必ずしもそうではない。たとえば、昭和23年に結婚したAさんの場合、同じチツソ²⁾の職場の人の紹介で結婚したが、妻とはじめて顔を合わせたのは結婚式当日だという（2004年2月16日聞き取り）。つまり、結婚に際して「見合い」さえも経てはいないわけである。

図1 見合い結婚と恋愛結婚の移りかわり



出典) 湯沢 (1987: 59)

このような例は稀だが、見合いしてから数日で結婚という例は、多く見られる。そこで重要なのは、両者を結び合わせる仲介者の存在である。多くは、親、兄弟、親戚、職場の同僚である。結婚は、こうした人々が世話を焼くものであり、相手への信頼というより、これらの人々への信頼によって結婚が成立したと考えた方がいい。たとえば、Bさんは、両親が早く亡くなったため、弟妹の面

倒を見ていたが、結婚の際も、いい人が見つかると、遠方で働いていた本人を呼び寄せ、見合いをさせ、それから数日で結婚式まで済ませてしまったという（2002年2月26日聞き取り）。そこには、親代わりである以上、弟妹の結婚の世話をするのは当然との意識が存在するが、結婚する本人の側にも、世話をする兄に対する信頼と同時に、兄の世話を受け入れるのが当然との意識が存在していたように思われる。つまり、結婚自体、自ら決めるものというより、信頼する他者にまかせるもの、という意識が一般的だったわけである。

それが恋愛結婚に移行する。もちろん、恋愛結婚自体は以前からあった。でも、そこには、結婚は、交際を経てから本人同士の合意によって決めるという意識の変化がみられる。それゆえ、「見合い」結婚の場合でも、即決で結婚式が行われることはなくなり、一定の交際期間を経てから結婚に至るようになったのである。

交際の機会という点から重要なのが、職場である。全国データでも、昭和30～34年に14%程度だった職場結婚が、35～39年には20%を超えるまでに増加しているが（図1参照）、聞き取りした人々の中でも、やはり職場で知り合って結婚したという人が増えているようだ。その中には、組合青年部、サークルでの活動を通じてという例が多い。水俣の場合、どうしても、チッソの従業員が多くなってしまいう聞き取り対象の偏りもあるが、自律的な結婚と、組合民主主義的な意識との相関は否定できないように思われる。そこには、水俣固有の事情も働いている可能性がある。それは、昭和37年から38年に起きた安定賃金闘争³⁾だ。この大争議と、その後の第1組合である新日窒労働組合に対する会社側による締め付けが、組合員の中の結びつきを強める方向に作用したように思われるのである。

以上、この時代における結婚の契機の変容について見てきたが、変化の実質を考えると、「見合い」結婚から「恋愛」結婚へという表現はあまり適当ではない。しいて言うならば、「世話焼き」婚から「交際」婚という言い方をするのがいいのではないだろうか。

3. 結 婚 式

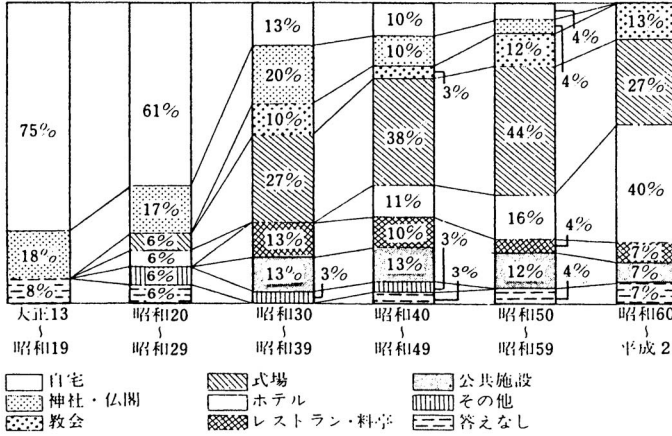
出会いとともに、結婚式自体も大きな変化を遂げたのがこの時代である。これ以前の結婚式は、基本的に自宅において人前で行われていた。その内容については、『新水俣市市民俗・人物編』（1997：254-267）に詳しい。まず、婿は、媒酌人、婿脇と呼ばれる介添人などとともに、嫁の家に「嫁迎え」に出向く。

そこで、親子の杯を交わし、婿の家に戻る。その後、嫁は、両家の媒酌人と嫁脇と呼ばれる介添人、近親者らとともに、婿の家に出かけた。そこで、三三九度の式が執り行われ、その後盛大な宴会に移ることになる。

聞き取りでも、昭和20年代の結婚式は、ほとんど自宅で行われていた。自宅が手狭な場合は、本家、あるいは網元の家などを借りることが多かった。しかも、式は、2日ないしは3日にわたって行われていた。1日目は、親戚、地域の人々、2～3日目は職場の人を中心に招待し、披露が行われた。式に出す料理の準備も大変で、親戚、近隣の人々が数多く手伝ったという。このように、結婚自体が、地縁、血縁によって成立するだけでなく、結婚式も地縁、血縁の協力のもと、地縁、血縁に対して披露する形で行われていたのである⁴⁾。

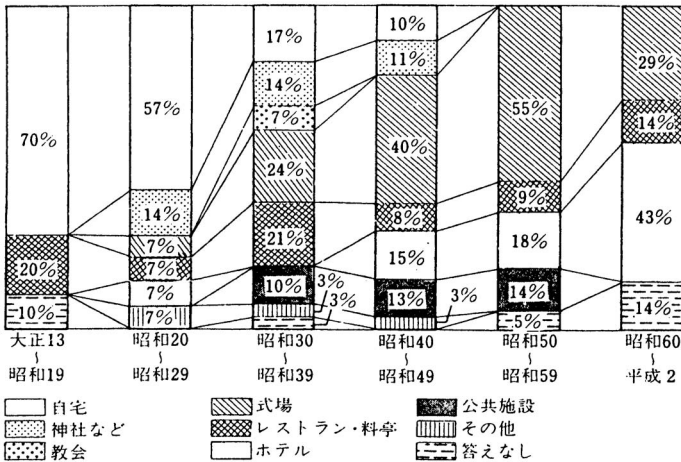
こうした従来⁵⁾の慣習が大きく変わるようになった。式の場所が、自宅外に移ることになったのだが、それは、主として二様の方向に変化した。一つは、商業的な施設を利用するものである。旅館などが用いられる場合もあったが、専用の結婚式場が誕生したのである(市川、1988:157)。もう一つは、公共施設を利用するもので、その多くが、会費制で行われた。志田基与師(1991)が行ったアンケート調査の結果にも、その変化が反映されている。まず、挙式の場所は、昭和20年代は、自宅が61%と圧倒的に多かったのだが、昭和30年代になると、自宅はわずか13%にまで減った一方で、専門の式場が27%と最も多くなり、ついで神社・仏閣が20%で、20年代には見られなかった公共施設、料亭・レストランがそれぞれ13%を占めるようになる(図2参照)。次に、披露宴の場所も、20年代は、自宅が57%を占めていたが、やはり17%まで落ち込み、式場24%、レストラン・料亭21%、神社など14%と、多様化しているのである(図3参照)。

図2 挙式の会場



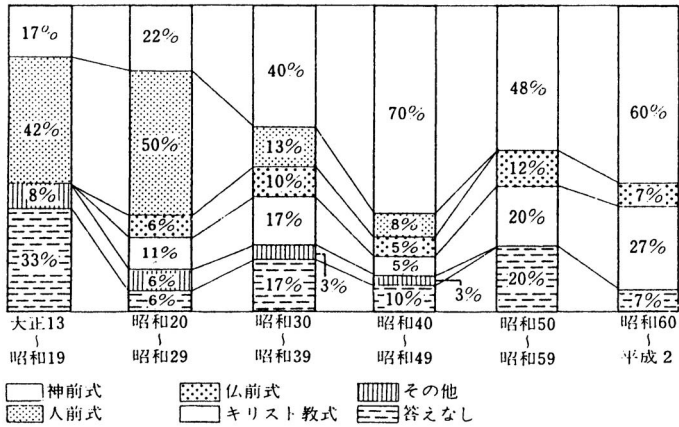
出典) 志田 (1991 : 164)

図3 披露宴の会場



出典) 志田 (1991 : 165)

図4 挙式の形態



出典) 志田 (1991 : 164)

3-1. 結婚式の商業施設化

この傾向は、水俣でも同様に見られた。一方が商業施設化だが、それは、志田が指摘するように、結婚式の神前化と並行して現れた。志田 (1991) の調査によれば、昭和20年代は人前式が50%であったのが、30年代にはわずか13%になり、神前式が22%から40%へと急増しているのである (図4参照)。水俣で、こうした流れを担ったのが、濱八幡宮である。宮司の妻で、料理を取り仕切っていた女性Cさんの語り (2005年9月26日聞き取り) を紹介することにしよう。

Cさんによれば、昭和30年頃から神前結婚式のブームが始まったという⁵⁾。それ以前は、あっても年間1~2組だったそうである。そして、70人程度の宴会が可能な座敷があったので、33~34年頃から披露宴も引き受けるようになった。改装のため、信用金庫に資金を借りに行くと、やはり民間の業者が結婚式場をはじめると教えられたという。つまり、ほぼ同時期にこうした動きがあったということは、水俣でもこの時代に、結婚式の外部化にともない披露宴会場に対する需要が急速に拡大したことを示唆している。水俣市では、こうした需要も見込んで、昭和40年に国民宿舎をオープンさせている。

結婚式の件数は、年々増加し、昭和52~53年頃がピークで、1日12~13組が式を挙げたときもあった。しかし、披露宴は昼と夜の2組しか引き受けられ

なかった。もちろん、その準備と片づけの手間の問題もあったが、昭和50年頃まで、披露宴の時間が長く、4～5時間飲んでいたという事情も作用した。つまり、披露宴といっても、それまでの自宅での結婚式の延長線上で、実質はハレの日の宴会であったと言えよう⁶⁾。

さて、披露宴を神社で行うにあたっては、昭和33年に調理師法が施行され、調理師免許がないと料理が出せなくなったため、Cさんは、氏子の人々に資金援助してもらい、公民館で開かれた講座に1週間ほど通い、試験を受けて、免許を取ったそうである。そして、3～6人を雇って、料理を作ったという。料理は、吸い物、天ぷら、炊き合わせといった和風のものが中心だったが、洋風の料理も取り入れた。その勉強のために、八代、熊本あたりまで出かけ、食べ歩いたとのことである。こうした料理の変化に呼応する形で、熱源も大きく変わった。当初は薪を使った「くど」だったのが、石油コンロを経て、ガスコンロへと急速に変わっていったのであった。この披露宴の手間は大きく、前日に仕込みなどの準備をし、式の翌日に後片づけと、3日がかかりだったそうである。

料理の持ち帰りも多かったが、引き出物も用意された。その当時の引き出物として、多く利用されたのがカステラである。当時菓子店を営んでいたDさん(2002年2月27日聞き取り)によれば、父親が長崎の老舗で修行したこともあり、カステラは、その当時の店の主力商品で、結婚式だけでなく、法事にも引き合いがあり、1釜焼き上げるのに1時間かかるので、24時間焼き続けるなどということもあったそうである。このように焼き菓子であるカステラが重宝がられていた背景には、冷蔵庫がまだ十分普及していなかったという事情もあった。また、輸送手段は、まだ自転車であった。菓子に使う地鶏の有精卵を買い出しに行くのも、注文を受けた品物を配達するのも自転車であった。100人以上の大量注文が入ったときは、何回にも分けて配達したり、リヤカーを使い、2人がかりで配達したりしており、途中で坂などがあると、大変だったということである。

以上見てきた結婚式の商業化の背景には、やはり高度経済成長にともなう家計の富裕化があったと思われる。自宅で、しかも地縁、血縁の人々の助力で結婚式を行えば、宴会の材料に多額の費用がかかるにしても、会場費、人件費は不要である。それを自宅外の専門の施設で行うとなると、それなりの出費となる。事実、高度経済成長とともに、結婚の費用は、昭和30年の平均5万5千円から、35年に9万8千円、40年に17万8千円と、急激に増加したのであった(中村・比留間、1985:214-215)。

3-2. うたごえ結婚式

結婚式のもう一つの変化の方向が、会費制結婚式である（市川、1988:156）。この場合用いられるのは、教育会館、婦人会館などの公的な施設であった。会費制結婚式で、この時代に特有なのが、うたごえ結婚式と呼ばれるものである。これは、折しも職場を中心に盛んになっていたうたごえ運動の延長線上で行われるようになったものである。最初のうたごえ結婚式を中心に、その内容を紹介することにしよう（2002年9月4日、2006年9月25日聞き取り）。

最初にうたごえ結婚式を挙げたのは、Dさん夫妻である。夫はチッソの土建課に勤務しており、妻はチッソ付属病院の看護婦であった。知り合ったのは、妻がメーデーの前夜祭に行く「父帰る」の芝居に出た際に、夫が差し入れに来ていたからとのこと。うたごえ結婚式をやるようになったのは、夫とチッソの寮で一緒だった人が、水俣工場のうたごえ運動のリーダーで、「うたごえで楽しくやろう」とけしかけたのがきっかけであった。この提案に対して、本人たちは、必ずしも積極的ではなかったが、抵抗感はあまりなかったという。実施するにあたっては、前述したうたごえのリーダーが同道して、職場の人に挨拶回りをしたそうである。というのも、当時は結婚式では職場の人々に酒食を振る舞うのが慣例で、彼らの説得が難しいと感じていたからである。

式が行われたのは、昭和31年の10月23日、昼間に別の場所で身内だけで結婚式を行い、うたごえ結婚式は、夕方から、幼稚園を借りて、うたごえサークルの人を中心に、園児用の机といすを利用して行われた。会費は、100円であった。二人は、街の洋服店が無料で貸してくれた背広とドレスを身にまとい、誓いのことばを述べた。出席者も、背広姿が多く、礼服を身につけた人はわずかであった。案内状は出さなかったために、知らない人もかなり混じっており、50～60人程度を予定していたのにもかかわらず、それ以上の人が集まり、大変だったとのことである。酒は、5～6人にトリス1本程度しか出されず、酔っぱらった人はいなかった。このように、質素に行われたために、結婚にあたって支給される共済金の3万円があまったという。また、珍しかったためであろう、本人たちは気づかなかったそうだが、2紙の新聞記者が取材に来ており、それぞれ数日後の紙面を飾ることになった。

このように、うたごえ結婚式の場合、職場の同僚などが中心になって、準備委員会のようなものを作り、式を取り仕切る。つまり、従来の地縁、血縁ではなく、職縁でつながった人々が中心になって、誰を招待するかなどを含め自律的に決めて、実行する形で式が営まれるようになったのである。しかも、水俣

の場合、うたごえ結婚式は、組合運動との結びつきが強かった。事実、聞き取りの限りでは、うたごえ結婚式、ないしは会費制結婚式をあげたのは、ほとんど組合活動に熱心な人々であった。また、Eさん（2006年9月25日聞き取り）によれば、昭和36～37年の「安定賃金闘争」後は、うたごえ結婚式に招かれることは、ある意味で組合活動家としての認知を受けることでもあったというのである。

しかし、伝統からの脱皮という一面も有しつつ、結婚式全体という観点から見れば、あいかわらず地縁、血縁を中心とした側面が残存していた。上述したように、うたごえ結婚式は、あくまでも披露宴の部分が分離・独立したにすぎない。三三九度といった狭義の結婚式の部分は、従来通り血縁、地縁によって執り行われており、場合によっては、地縁、血縁向けの披露宴を別途行う例もあったからである。

というのも、結婚式は、もともと人々に酒食を振る舞うハレの場という色彩があった。そこで、質素な形式で行われる会費制の結婚式に強い異論を唱える親戚、職場の同僚などもいたのである。Dさんの場合、母方の叔父が強い不満を漏らしたため、別に2晩ほど酒を振る舞ったそうで、Eさんの場合は、式の後に自宅で親戚を招いてお詫びの膳をとったという。つまり、不満をなだめるための場が、別に設定されたわけである。

以上見てきたように、結婚式は、二通りの方向で変容していった。ともに、自宅から自宅外へとの動きではあるが、その内容はかなり異なる。一方では、狭義の式の部分では、人前から神前への変化が、また披露宴の部分では商業施設化が見られたが、出席者という点では、従来通り血縁、地縁を中心に行われている。もう一方の会費制の場合は、狭義の式の部分は、従来通りの慣習を踏まえて自宅で人前で行われるが、披露の部分で職縁を中心とした形で、主として公的な会館などを利用して執り行われることになったのである。どちらも、大きな変化ではあるが、ともに狭義の結婚式と披露宴を明確に分離しつつ、一部に慣習に従った部分を残すことによって、変化の大きさを緩和しているというように見ることもできるのである。

4. 新婚旅行

新婚旅行が普通に行われるようになったのも、この時代である。昭和30年代初頭の旅行先で多いのが、霧島である。もっとも近い観光地だからであろう。それが、やがて、九州島内へ、さらには本州方面へと、旅行先は遠くに延びて

いく。

交通機関は、霧島の場合、バスないしは鉄道の併用である。これが、九州島内へと広がるにつれ、自動車、そして場合によっては飛行機と、多様化していく。航空機が珍しかったせいであろう、昭和 39 年に結婚した F さん夫妻は、鹿児島から宮崎まで飛行機を利用したという（2003 年 9 月 15 日聞き取り）。いずれにせよ、旅行先の遠方化、交通機関の多様化の背景には、やはり高度経済成長によって、家計の余裕が生まれてきていることがあると思われる。

しかし、新婚旅行に関して、興味深い例がある。

一つは、「知らない人とは行けん」という理由で、新婚旅行に行かなかった例である（2003 年 2 月 28 日聞き取り）。昭和 29 年に結婚した G さん夫妻は、妻の叔父がチツソで夫と同じ係で、看病という名目で呼ばれ、見合いをしたという。妻が鹿児島県の川内在住ということもあってか、結婚式までの 4 ヶ月間で 3 回しか会ったことはなかったそうである。それゆえ、夫が上述したような理由を挙げたため、新婚旅行には行かなかったというのである。「世話焼き」婚だからこそその事態で、本人同士の結びつきを重視した「交際」婚では考えられないことであろう。結婚の契機の変容が進行しつつある時代特有のエピソードだと言えよう。

もう一つは、親、親戚が同道している例が見られることである。昭和 37 年に結婚した H さん夫妻は、夫の母親、親戚 2 人と 5 人で、自動車を借りて、阿蘇、長崎方面に 3 泊の旅行をしたというのである（2002 年 9 月 3 日聞き取り）。時代的に、まだ旅行は贅沢な時代であったのであろう。せっかくの機会だからということ、こうした形をとったのではなかろうか。

このように、新婚旅行に関しても、高度経済成長とともに人々の生活が向上していく様子がうかがえると同時に、新婚旅行が定着していく過渡期としての姿をかいま見ることができるのである。

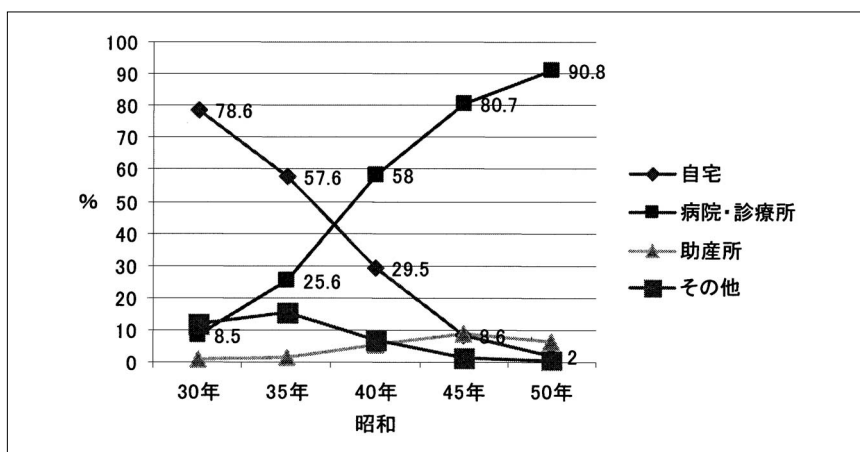
5. 出 産

また、出産もこの時代に大きな変化を迎える。この点は、様々な文献で言及されているが（藤田、1988；船橋、1994）、水俣も例外ではない。出産の場所が、自宅から病院に移行するとともに、立会人が助産婦から医師へと変わっていったのである。船橋（1994：63-64）は、前者を「施設化」、後者を「医療化」と呼び、区別している。水俣市自体のデータは入手できなかったが、熊本県全体のデータで、その変化を見てみよう。

5-1. 出産の変容

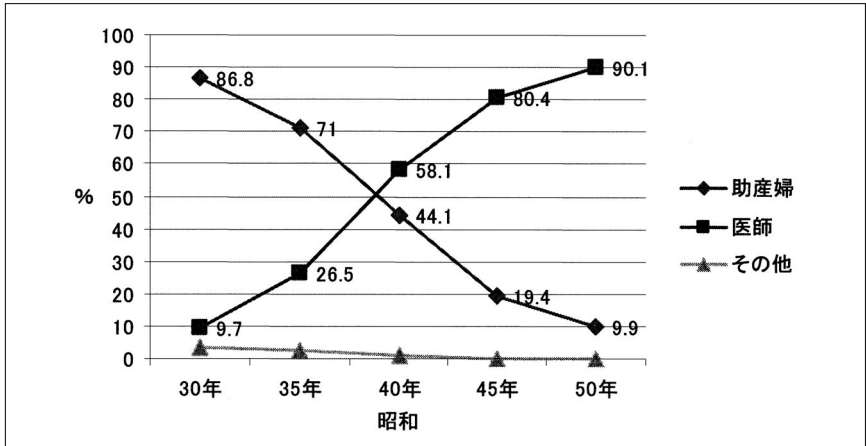
まず、施設化の進行である（図5参照）。昭和30年段階では、自宅で出産している人が78.6%で、病院・診療所で産んでいる人はわずか8.5%にすぎない。これが35年になると、自宅が57.6%に減り、病院・診療所が25.6%を占めるようになり、40年には、病院・診療所が58.0%と、自宅の29.5%を逆転するようになる。医療化も同様である（図6参照）。30年では、助産婦86.6%、医師9.7%と、ほとんどの場合助産婦が立ち会っていたが、35年になると、助産婦71.1%、医師26.5%、40年になると、医師58.1%に対して助産婦44.1%と、やはり逆転しているのである。藤田（1988:50、107）が提示している全国データと比べると、日本全体より変化の進行は遅れているものの、熊本県でも急速に施設化、医療化が進んでいたわけである。

図5 出産場所の推移



出典) 熊本県衛生部 (1982:32) より作成

図6 立会人の推移



出典) 熊本県衛生部 (1982 : 32) より作成

このように、変化は急速に進行したが、そのため過渡期特有の事例も見られる。まず、第1は、水俣保健所の事務の仕事をしていたIさんの場合である(2006年9月26日聞き取り)。彼女は、昭和31年に第3子を、32年に第4子を自宅で出産した。その際は、同じ地域に住む遠い親戚にあたる助産婦に頼んだという。つまり、出産の介助は、地縁、血縁的なつながりで行われていたわけである。ところが、二人とも生後10日以内に病気でなくなる⁷⁾。そのことで、当時の保健所長から、今時自宅で生むとは馬鹿かと怒られたという。そして、翌33年に次の子供を妊娠した際は、保健所長の紹介で、市立病院で出産した。本人は、当時は水俣の街中ではなく、水俣の北に位置する湯浦(芦北町)に住んでいたため、近くに産科の医者もなく、病院で出産するという意識はなかったと回想している。しかし、医療の最先端の知識が入ってくると思われる保健所という機関で働いていた人が、自宅での出産を自明視していたという事実は、一般的には出産は自宅という考え方が当たり前であったことを示唆する。

第2は、うたごえ結婚式第1号を挙げたチッソ付属病院勤務の看護婦Dさんが、昭和32年に第1子を病院で出産したにもかかわらず、35年の第2子と39年の第3子は、自宅で助産婦の介添えで生んだというエピソードである(2002年9月4日聞き取り)。理由をたずねると、彼女は、付属病院の産科の医師が嫌いだったからと答えた。特殊な例ではあるが、やはり看護婦という専門知識を

持った人が、自宅での出産を選んでいるわけで、まだ病院での出産が自明視されておらず、自宅での出産も一般的であったことを物語っていると思われる。

第3は、昭和31年に第1子を、33年に第2子を、いずれも市立病院で出産したJさんの話である（2003年3月2日聞き取り）。Jさんは夫を婿として迎えたが、自身の母親が昭和20年になくなっており、自宅で産むには人手がないので、病院で出産したというのである。病院での出産は、入院費用も必要で、自宅でのそれより出費は大きいはずである。にもかかわらず、地縁、血縁に介助を頼むのではなく、病院での出産を選択したのは、これまでも触れたように、経済成長の結果として、それだけ家計に余裕のある家庭が増えてきたことが背景にあると考えられるのである。ちなみに、Jさんの夫は、チッソの酢酸係に勤務していたが、その当時水俣でもっとも給料がいいのがチッソだった。市役所に臨時職員で勤務していて、正規職員になれる可能性があっても、給料の高さに惹かれて、チッソの試験を受けて、入社した人すら存在していたのである。

5-2. 市立病院での出産

このように病院での出産が増えてきたわけだが、病院の産科の状況はどのようなものであったのであろうか⁸⁾。水俣市立病院の産婦人科に勤務していた2人の看護婦Kさん、Lさんの回顧談を紹介していこう（2006年9月27日聞き取り）。なお、Kさんは昭和31年に、Lさんは34年に看護学校を卒業して、市立病院に就職した方である。

さて、昭和30年代前半の市立病院の産婦人科は、常勤の医師1名、非常勤1名（1年交替で大学医局から派遣）、助産婦3名の体制で、35～36床のベットを有していた。出産に際しては、陣痛が始まると看護婦が観察して、間隔が5分程度と短くなると、助産婦を呼びに行くというやり方をとっていた。年間の出産数は、400人を超えており、40年代には600人程度になったこともあったという。新生児は、母親とは離され、「ベビー室」と呼ばれる部屋に集められていて、授乳の際は看護婦が母親のもとに連れて行った。体重2,500g以下、月足らずの未熟児の場合は、保育器に入れられた。保育器が足りず、1台に2人を同時に入れることもあり、すぐに2台、3台と増やされた。また、保育器のない開業医から未熟児が連れてこられることもあった。母親は、へその緒がとれたら退院で、産後1週間程度、早い人は5日で退院だった。新生児は、生まれたときの体重に戻ったら退院となるのが通例であった。未熟児の場合は、退院が遅れることになり、通勤途中に退院した母親のもとに寄り、母乳を預かり、病棟の

未熟児に飲ませたこともあったという。

また、その頃は、出産に際して父親が駆けつけてくることは少なかった。舅などが孫の顔を見に来ることもなかった。別に病院側で規制しているわけではなく、来た人には子供を見せたというが、婦人病棟ということもあって、「男が行かれようかい」という意識であったという。

産科病棟は、外科病棟と比べて、身体的には楽だったという。また、入院患者、つまり妊婦は、二人と年齢が近いこともあり、神経を使うこともあったが、コミュニケーションはとりやすかったそうである。しかし、産科では、看護婦は助産婦の下働きのような仕事しかできず、勤務している助産婦の中には、看護婦資格に加えて、助産婦の資格を持っていることもあって、看護婦より上との意識を持っている人もおり、Kさんは不満を感じていたという。

市立病院に勤務する助産婦は、助産婦学校出身者だったが、昭和35年頃に結婚退職で足りなくなり、街で産婆をしていた助産婦が入っていたことがあったという。その頃は、本採用は28歳以下だったが、その人は既に40歳を過ぎていた。街では、止血を手で行っていたなどのため、止血のピンセットなど、器具の扱いに苦労していたとのことである。このように、街での産婆と病院の助産婦では、仕事のやり方に違いが見られたのである。

病院での出産が急増する中、街で産婆をしていて、病院勤務の経験のない助産婦たちは、個人で出産にかかわるのが難しくなったのであろうか、5人ほどで集まって街中に助産所を作り、出産を行わせていたという。また、病院退院後のフォローアップということで、分娩後の沐浴などに回っていたそうである。

5-3. 出産をめぐる陰

以上記してきた病院での産科などにかかわる語りの中でほとんど浮かび上がってこないのが、水俣病の患者、漁師の家庭の妻の話である。もちろん、胎児性の患者も、生まれたばかりの新生児の段階では区別がつかないこともあるのだが、彼らは貧しく、とても市立病院では出産できなかったからである。また、自身の出産についてうかがった人々においても、同様に出産と結びついた形では、水俣病の語りはほとんど聞かれなかった。聞き取りをした方の多くは、水俣の街中に住んでおり、水俣病が集中的に発現した漁師家庭の人はほとんどいないからである⁹⁾。

唯一そうした語りを聞いたのは、丸島で漁師を営んでいたMさん夫婦である(2005年9月27日聞き取り)。漁が自主規制がされた時代に、彼らの生活は困

窮を極めた。また、胎児性の子供が生まれており、その恐怖もあった。そのため、昭和34年、36年と2人の子供を産んだものの、3人目は「産みきれなかった」という妻の語りは、痛切に響いた。彼らは、産むのをあきらめた人も多いのではないかという。確かに、彼らのように、多くの漁師の家庭では、出産を断念する、あるいは中絶せざるを得なかったはずである。事実、ある人の話の中で、中絶で有名な開業医があったという語りが出てきたのである（2006年9月27日聞き取り）。

また、原田正純（1985:82-84）が行った水俣病多発地域での聞き取り調査における流・死産率は15%程度で、必ずしも高くないが¹⁰⁾、同じ母親が流・死産を繰り返したり、生後まもなく新生児が死亡する例が紹介されている。有機水銀を多量に含んだ魚介類を口にしていた母親の胎児に様々な異常が広がっていたことは想像にかたくない。だが、そうした現象が見られたのは、水俣全体から見れば、一部の漁村地域である。街中を中心とした多くの水俣の人々の出産にかかわる場面では、語られなかっただけという可能性は否定できないものの、水俣病の影はほとんど見受けられないのである。

最後に、この時代の結婚・出産にかかわって見逃せないのが、結婚・出産退職の問題である。話を聞いたチッソの女性従業員の多くが、結婚・出産後も働き続けていることに驚かされた。大沢・鈴木（1985:256-257）によれば、結婚退職を無効とした女性が勝訴を勝ち取ったのは、昭和41年のことである。ところが、それ以前に結婚・出産したチッソの従業員である女性たちが、働き続けているのである。しかも、チッソには、朝10時から授乳時間の制度があり、女性従業員がチッソの門の前に連れてこられた乳児に母乳を与えていたというのだ（2002年9月4日聞き取り）。

うたごえ結婚式を挙げたDさん夫妻は、これは新日窒労働組合が組合員を守ってきたからであり、第2組合である新日本窒素新労働組合は、共働きの女性はやめさせていたと語る（2006年9月25日聞き取り）。また、水俣市役所に勤めていたJさんは、第1子の産休中に、やはり組合の書記が自宅に訪ねてきて、退職するように言われ、それに従ったという。実際、市役所でも既婚者の女性はほとんど辞めていたそうである（2003年3月2日聞き取り）。その点でも、新日窒労働組合に属する女性たちが働き続けてきたことは特筆に値することであり、ここにも、うたごえ結婚式に見られた組合民主主義的な男女同権の思想を見ることができよう。とはいえ、聞き取りからすると、家庭の内部では、そうした対等な関係が成り立っていたのかどうかは、保証の限りではなさそうである。

6. おわりに

以上、昭和30年代の水俣における結婚、出産の変容を、人々の語りをもとに記してきた。結婚、出産いずれも、日本全国と同様、この時代に大きな変化を遂げていた。もちろん、前述したように、披露宴は職場の人を中心に会費制で行っても、三三九度の式は、従前通り自宅で身内を中心に人前でやるなど、その変化は過渡期的で、多様な姿をとった側面もある。しかし、一般的に言えば、結婚は、親戚などの縁者による「世話焼き」婚から、出会いの契機にかかわらず、男女の交際を経て結婚に至る「交際」婚へと変わった。それとともに、結婚式も、自宅を離れ、専門の式場で行われるか、あるいは公共施設において会費制で行われることになった。水俣では、後者の一つの形式として、チッソの組合員を中心としたうたごえ結婚式も普及した。一方で、出産も、急速に病院へとその場を移していった。このように、結婚式も、出産も、ともにその場を自宅の外に移すこととなったが、それは、結婚式場、病院といった専門の施設を利用することでもあったのである。

このことは、同時に、地縁、血縁と結びついたそれまでの他律的な慣行が急速に変容していったことを示している。だが、それは、必ずしも結婚、出産の自律化を意味しない。確かに、結婚は、両者の自律的な意思決定によるものになっていったわけだが、出産の場合、病院、医師の規制の下で営まれるようになったわけで、新たな他律の形態に移行しただけと言えなくもないのである。

また、地縁、血縁が希薄化しつつある一方で、職縁のもつ比重は大きくなった。その中で、水俣において注目すべきは、組合を中心とした結びつきの強さである。そこには、先に記したように、安定賃金闘争が組合員の間の絆を強めたという面があることは否定できないように思われる。そこには、組合民主主義的な意識も介在していた。それが、うたごえ結婚式という形式を採用させたのだし、結婚・出産後も働き続けることを選択させたと思われるのである。

最後に、聞き取りの対象が街中の人々が中心だったこともあり、結婚、出産に絡んで、水俣病の話はほとんど聞くことがなかった。前稿（平岡、2006:28-29）でも指摘したように、一般の水俣の人々の記憶の中では、水俣病はあまり見えなかったものとして存在しているのである。

注

- 1) 実際には、「患者」と「一般の人々」を截然と分けることはできない。ここでは、居住地域が離れていたり、身内に水俣病患者がいなかったために、どちらかという水俣病と心理的に距離が遠いと感じていたような人を、「一般の人々」と呼んでいる。
- 2) 現チッソ株式会社の昭和 39 年末までの正式名称は、新日本窒素肥料株式会社である。しかし、本稿では、煩雑になるので、チッソという通称を使用する。
- 3) 安定賃金闘争は、昭和 37 年 2 月に新日窒労働組合がベースアップを求めてストライキに突入したところ、会社側が安定賃金制度実施を提案してきたために、翌 38 年まで続いた大争議。その過程で、第 2 組合である新日本窒素新労働組合が結成され、従業員の間にも深刻な亀裂をもたらすとともに、家族、地域の人々の間にも後々まで大きな対立、しこりを残した。その経緯については、矢作 (1998-99) および水俣市史編さん委員会編 (1991) を参照。
- 4) 式を簡略化して、1 日で済ました例や、嫁の実家の方が広いので、そちらで三三九度を済ませて、バスで婿の家へ移動し、職場の人などと呼んで披露宴を行った例など、それぞれの事情でかなりの違いが見られる。
- 5) 志田 (1991:161) によれば、この火付け役は、東京の明治記念館だったという。
- 6) 東京などでも、現在のような披露宴のスタイルの原型が定式化されたのは、昭和 30 年代後半だという (志田、1991:171-179)。
- 7) 水俣保健所管内の乳児死亡率 (新生児死亡率は、昭和 45 年以降のデータしか掲載されていない) は、昭和 30 年で出生 1000 件あたり 37.2 で、これが昭和 50 年になると、9.9 まで減少している (熊本県衛生部、1982:62)。この間に熊本県で病院・診療所で出産する割合は、8.5%から 90.8%へと急激に上昇している。同様に、立会者に占める医師の割合も、9.7%から 90.1%になっている (図 5、6 参照)。このように、熊本・水俣でも、「施設化」「医療化」と乳児死亡率の低下は相即的に進行したのである。
- 8) 当時水俣で助産婦であった方で、現在も水俣に住んでおられる人はほとんどいなかった。また、現在も水俣におられる方については、諸事情のため聞き取りができなかった。

- 9) 患者でない人々を中心に聞き取りをした理由については、平岡（2006）を参照。
- 10) 水俣保健所管内の死産率は、昭和30年は出生1000件あたり71.1、35年は76.6で、熊本県全体の88.6、100.2を下回っている（熊本県衛生部、1982:68）。また、同じく水俣保健所管内の乳児死亡率は、昭和30年で出生1000件あたり37.2、昭和35年で44.3となっており、熊本県全体よりは高いものの、これを上回る値を示す地域もあり（熊本県衛生部、1982:62）、水俣病の影響があるかどうか、これだけでは判断できない。

文 献

- 藤田真一、1988、『お産革命』朝日文庫
- 船橋恵子、1994、『赤ちゃんを産むということー社会学からのこころみ』NHK ブックス
- 原田正純、1985、『水俣病にまなぶ旅ー水俣病の前に水俣病はなかった』日本評論社
- 平岡義和、2006、『水俣と水俣病の物語』序説ー方法論に関する試論『人文論集』57-1
- 市川孝一、1988、『結婚式の文化的変遷』日本家族心理学会編『結婚の家族心理学（家族心理学年報6）』金子書房
- 熊本県衛生部編、1982、『熊本県衛生統計年報昭和55年』熊本県衛生部
- 水俣市史編さん委員会編、1991、『新水俣市史下』水俣市
- 水俣市史編さん委員会編、1997、『新水俣市史民俗・人物編』水俣市
- 中村千恵子・比留間千穂、1985、『結婚と離婚』高度成長期を考える会編『高度成長と日本人1 個人篇 誕生から死まで』日本エディタースクール出版部
- 大沢久子・鈴木望、1985、『職場』高度成長期を考える会編『高度成長と日本人1 個人篇 誕生から死まで』日本エディタースクール出版部
- 志田基与師、1991、『平成結婚式縁起』日本経済新聞社
- 矢吹紀人、2006、『水俣 胎児との約束ー医師・板井八重子が受けとったいのちのメッセージ』大月書店
- 矢作正、1998-99、『チソ史1960ー65 安賃争議（1）（2）』『浦和論叢』21、22
- 湯沢彦彦、1987、『図説現代の家族問題』NHK ブックス

付 記

本稿は、2001～2004年度科学研究費補助金基盤研究C2(課題番号:13610257)、および2007年度科学研究費補助金C(課題番号:19530436)による研究成果の一部である。この研究を行うにあたっては、聞き取りに応じてくださった方をはじめ、多くの方々にお世話になった。特に、聞き取りを行うにあたっては、新日窒労働組合の元委員長である山下善寛さんに多大な助力をいただいた。山下さんは、当時の状況を知るには、新日窒労働組合だけでなく、新日本窒素新労働組合の組合員をはじめ、幅広い層の人々から話を聞くようにとのアドバイスをくださった。山下さんをはじめ、お世話になった方々に、心よりお礼申し上げます。